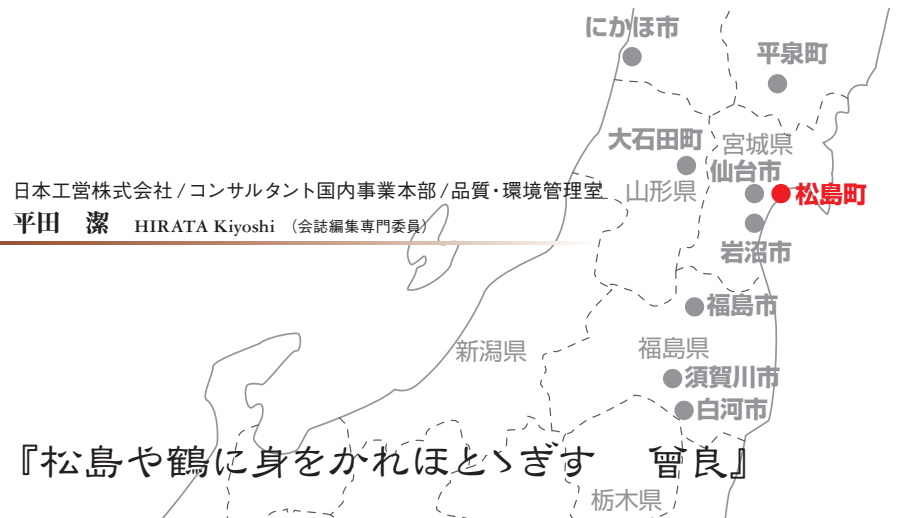


あの頃の風景

おくのほそ道 第9回

扶桑第一の景勝地 「松島」



① 津波で崩壊した雄島に渡る昔の渡月橋

弟子の河合曾良を伴い、1689（元禄2）年の春頃に江戸深川を発った松尾芭蕉は、41日目の5月25日（新暦6月25日）の昼近くに塩釜から船を借り松島へ到達した。

松島には260余りの島々があり、平安時代から歌枕の地として知られ、鎌倉・室町時代には円福寺（現在の瑞巖寺）・雄島を中心に霊場として栄えてきた。江戸時代になると、安芸の宮島、丹後の天橋立とともに「日本三景」の一つに数えられ、1952（昭和27）年に国の特別名勝に指定される。

芭蕉は「扶桑（日本）第一の好風」と賞賛し、あまりの絶景に「造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を尽さむ」とし、句を詠まなかったと言われている。曾良はこの絶景に「この壮大な松島には鶴が似つかわしい。そこで鳴いているほととぎすよ、鶴の衣をまとして、優雅に見せてくれ」と感嘆して前述の句を詠んだ。

仙台に城を築いた伊達政宗は、塩竈神社など代表的

な寺社を造営・整備した。長らく荒れ果てていた円福寺は、瑞巖寺として1609（慶長14）年に復興した。桃山建築の代表的なものとして国宝や重要文化財に指定されている。

古くから松島の観光は、塩釜から船で遊覧して松島海岸に着くのが一般的で、芭蕉もこのコースをたどった。海岸には観光客を宿泊させる旅館が当時からあった。松島の道路は、奥州街道の枝線である浜街道に属し、そこから各街道の分岐点となっていたため、塩竈神社や金華山参りの際に多くの人を通った。仙台藩の塩田があり、江戸へ米を運ぶための中継地だったため、藩の役人や商人などが泊まる旅館等もあり、大変賑やかな宿場となっていた。

1890（明治23）年には、東北本線の松島駅が営業を始め、これに合わせて道路の整備も行われ、多くの観光客が松島を訪れるようになった。1944（昭和19）年に



③（上）現在の松島海岸通り（国道45号）

②（左）昭和初期の松島海岸通りの町並み

⑤（右）1956年の東北本線新松島駅（手前）と仙石線（中央）

④（下）現在のJR東北本線松島駅



は塩釜－松島間の鉄路ができ、国道45号となる道路の整備も進んだ。東北本線は、1962（昭和37）年に山まわりの線路が廃止されて、現在のルートとなった。さらに、バイパス道路をはじめ、多くの道路も整備され、三陸自動車道は、2002（平成14）年に仙台東部道路とつながった。

2011（平成23）年3月11日の巨大地震による大津波は、東日本の太平洋沿岸に壊滅的被害をもたらした。松島は260余りの島々に守られ奇跡的に被害は少なかったが、震度6弱の地震と最大3.8mの津波に襲われた。震災当日、海岸部には約1,200人の観光客がいたが、裏山に避難し、一人もけが人を出すことなく、4日目までに全員無事に帰路につけた。松島の島々は大きな変化はなかったが、雄島に架かる渡月橋が津波で崩壊（2013年に再建）し、遊覧船も26隻が桟橋ごと流された。

国宝瑞巖寺を始めとする歴史的建造物群は、幸いなことに津波被害は少なかったが、趣きのある瑞巖寺参道

の杉並木の1/3が津波の塩害により枯れた。しかし震災4か月後の7月末には、観光施設等95%の施設が復旧し、松島には津波が来なかったと錯覚させるほど、穏やかで美しい景観を取り戻している。松島が早期に復旧・復興することが東北・被災地の復興につながると信じ、多くの地元の関係者やボランティアが努力した賜物である。

古くから文人墨客が訪れた松島が、今後も、地元の人々の努力により美しい景観と町並みを保全してゆかれることを望んでやまない。

<参考文献>

- 1) 『松島町史』松島町史編集委員会 平成3年3月
- 2) 『松島町誌』松島町誌編集委員会編 昭和48年3月
- 3) 『松島の昔と今』ふるさと松島を知る会 昭和56年3月
- 4) 『松島観光の震災と復興』佐藤久一郎 貿易研修センターホームページ (<http://www.iist.or.jp/jp-m/2013/0216-0882/>) 2013年2月

<取材協力>

- 1) 松島町総務課・教育課・文化観光交流館・勤労青少年ホーム
- 2) 瑞巖寺

<写真提供>

- ①、②、⑤ 松島町役場
- ③、④ 平田 潔